

こんな国際会議が成功する

上出 洋介

名古屋大学太陽地球環境研究所 所長・教授

1999年8月に英国バーミンガムで開かれた「第22回国際測地学・地球物理学連合（IUGG）総会」において、次回2003年総会を札幌開催へと招致することに成功した際の立役者の一人。

私は、今回2003年IUGG（国際測地学・地球物理学連合）総会の招致という歴史的なイベントに携ったわけですが、IUGGといいますのは、地球の中心から惑星、太陽系の果てぐらいいまで、もう少しわかりやすく言いますと、人工衛星が飛んでいるスペースまで全てを含んだ幅広い領域をカバーする国際組織です。現在76か国がIUGGに加盟しており、地震、火山、気象、水文、海洋、電磁気など、専門ごとに7つの協会から成っています。戦乱続く1919年、国際学術会議のもと世界で最初に3つの学術団体が出来ましたが、その中の一つです。実際の開催自体は4年後になりますが、アジアで初めて、この由緒ある国際会議を日本に招致することに成功したわけです。今日は、概念的なことではなく、今回のこうした経験を踏まえ、むしろ実践的なお話をしたいと思います。

いろいろな国際会議がある

本稿は「こんな会議が成功する」というタイトルに落ち着きましたが、一時は、「良い会議、悪い会議」といういささかセンセーショナルな題名の候補もありました。誤解があり得ますので申し上げますが、悪い会議というのは、別に非常に悪い会議ということではありませんで、単に非常に良い会議ではないというだけのことです。逆に言いますと、100点が取れるような会議というのは今までに恐らくなかったのだと思います。それはなぜかといいますと、ここにおられるPCOの皆様のせいではなく、私たち研究者、つまり会議の主催者が、矛盾する要求を出しているためだと思います。ですから、100点満点をとった会議というのは絶対にはないのです。しかし、なるべく100点に近い、多くの関係者が成功したと評価する会議を行ないたいものだと思うわけです。また、今日は、宇宙・地球科学の研究者としての自分の経験を通してのお話がほとんどです。そうした意味で、多少特殊な部分や偏っている内容があるかもしれません。しかし、いろいろな分野の学会、あるいは人が集まるイベントやコンベンションに、最低限共通しているところも多くあるはずで、例えば、世界各地から議論をするために地球の1ヶ所に人々が集まって来るということは、我々が参加する学術的な会議であっても、商業的なイベントであっても、スポーツの集まりであっても、政治的会議であっても同様です。つまり、人間が地球のいろいろな場所か

らはるばる 1 か所に集まるわけです。人という生物が、数日間、1 週間、あるいは 2 週間、1 か所に集まる。先程、触れました IUGG 総会も、間に週末をはさみ、2 週間続く国際会議です。IUGG というのは、夏に行われます。会議自体は 2 週間なのですが、その前の週末、あるいは後の週末のどちらかに、あるいは両方に家族を呼ぶ人も多く、おそらく 1? 2 割の方がそうします。次回の IUGG 2003 年総会は札幌市で行われることが決定しましたが、6 千人規模の国際会議になると見込まれています。

今日は、この講演が終わりましたら、すぐに仙台で行なわれている学会総会に行かなくてはなりません。これは毎年 2 回行われている我々の専門分野の国内会議で、参加者が 300 人くらいの会議です。その会議が金曜日に終わり、そのまま土曜日から茨城県の大洗、東海村のちょっと南です、で開催される宇宙天気に関する国際会議に出席します。私は、この国際会議の組織委員を務めておりますが、議論を密接にするために、わざと規模を小さくしている国際会議です。参加者数が約 70 名で、うち外国人が 20 人くらいです。科学技術庁から、助成を受けています。おそらくここにおられる PCO の方々は、この種の国際会議開催の情報は掴んでいないのではないかと推察します。といいますのは、会議の提案が突然だったのです。

人類はいまいわゆるコンピューターの 2000 年問題に直面していますが、実は、太陽活動やオーロラ活動に関連したもうひとつの 2000 年問題というものがあるのです。郵政省通信総合研究所の友人研究者が、突然去年の 12 月に「国際会議を一緒に企画しませんか」と、誘いの電話をかけてきたのが始まりです。

オーロラの発生が太陽に影響されることはご存じかと思いますが、太陽は 11 年の周期で活発・不活発をずっと繰り返しています。そして、次のピークが実は来年 2000 年になるわけです。オーロラの発生度が来年にピークになります。そうすると、極地方に行けば、毎晩のようにすばらしいオーロラが現われます。ひょっとすると、北海道でも見られるかもしれません。ところが、この一連の太陽-地球過程には社会にとって悪い影響があることは案外知らないわけです。太陽が活発であるということは、黒点の数で考えていただければ良いのですが、黒点の数が増えると、地球の周りで悪さをするということが最近わかってきたのです。地球というのは、おいしい空気があって水があるところまでは、皆さん知っていますが、この地球が磁場をもっているというのは意外と知らない人が多いのです。「地球が磁場をもっている」と言うと、大抵の人は「ああそうですか」と答える程度だと思いますが、「実は地球が磁場をもっていなければ、皆さんは生きていけません」といえば少しは深刻に聞いてくれるかも知れません。もし地球が磁場をもっていなければ、太陽からの電気の粒が直接地球に吹き付け、この空気もなくなってしまうのです。地球に磁場があり、そして空気があるからこそオーロラができるわけです。ということは、逆に言えば、オーロラが見られるということは、我々生命がこの地球上で生きていけるという証しでもあるわけです。

その太陽のピークが 2000 年になることが予想されているわけですが、オーロラが沢山見えるという良いことだけではなく、地上の通信回線を乱したり、人工衛星の軌道を狂わせたりします。人工衛星の計器がおかしくなったという事件は、すでにこの 20 年間で 1 万件

も報告されています。皆さんはおそらく、リレハンメルオリンピックのとき、ジャンプの選手が滑走をしている最中に、ばたっと25分間放送が切れてしまったことを記憶されているのではないかと思います。もちろん、翌日大きく新聞に取り上げました。その選手は結局銀メダルを獲得したのですけれども、このように通信が狂うと、「ああ、そうですか」ではすみません。例えば、カナダや北欧で発電所が直撃されることもあります。全世界が通信衛星を使って交信しており、それが乱れると、例えば、雑誌が発行できなくなると経済問題に発展します。そういうことが、2000年に起きる可能性があるわけです。

少々説明が長くなりましたが、このオーロラのいたずらなどの宇宙天気の流れを第2の2000年問題として捉え、研究者の方から問題提起をし、国際会議を実施しようと企画したわけです。この国際会議は、ほとんどアメリカと日本だけ小さいグループによるものです。それに対し、IUGGという組織は、先程述べましたように、5千人、6千人といった規模です。私は、こうした大きな国際会議から小さい50人程度、あるいはもっと小さく20人くらいの国際会議までの組織に携わったことがあります、それぞれゴールが違います。

良い会議とは

最初に話が戻りますと、いろいろなサイズのいろいろな目的の国際会議があるわけですが、最低限「人間が1ヶ所に何日間が集まり、泊まり、遊び、食べる」という点では共通しています。ですから、人の動きを的確にキャッチし、うまくコントロールしなければなりません。オーガナイズ（組織）とは、会議の中味そのものに留まらないわけです。これからお話することは、科学の会議からの経験を踏まえてのことなのですけれども、人間が集まることをうまくコントロールするという点への共通性が、いろいろあると思うのです。こうしたノウハウを含めて、良い会議というものはどういうものなのか、どういう会議を成功したというのか、どういう会議だったら参加者から非常に楽しかったというお礼の手紙がくるのか、という話をしていきたいと思います。

まず初めに、良い会議というのは誰にとって良いのかという疑問があると思います。まず、組織する側、つまり我々主催者にとって良い会議とはどういったものかということ、これは案外ははっきりしております。例えば、政治の会議で言うと、歴史に残るような、あるいは教科書に残るような、京都宣言というようなものが出る会議があります。似たようなものが、我々科学の分野にもあるわけです。会議での研究発表がもとになって本が出版されたり、専門ジャーナルにハイレベルの論文が沢山投稿されたり、あるいはそこまで至らなくても、活発な良い議論ができ、参加者が啓蒙されたというような場合は、成功したという評価が出るでしょう。たとえば一つの研究テーマであっても、世界のいろいろな所でいろいろな手法で研究が行なわれており、普段はある意味で競争をしており、と同時に、ある意味ではお互いに助け合っているのです。離れたグループが、お互いに少しずつヒントをもらいながら、普段研究しているわけですが、そうした人達が一堂に集まってフェイス to フェイス議論をし、お互い啓発し合う、教育し合うというユニークな点が国際会議にあります。このような交流が効率よくできれば、総合的に評かして、「良い会議であった」

と言えるでしょう。

また、研究者の会議であっても、決議を出し合うことがたびたびあります。例えば、IUGG においては、約 30 個の決議が出されます。たいていの場合、どこかの国の政府に向けて決議文を出します。学問発展のためには何が足りないのかを、ビジネスミーティングや役員会で議論をし、最終的に決議文にもっていきます。もちろん研究者の間で意見がまとまらず、決議に達しないこともしばしばあります。研究者に言わせると、良い会議と言いますのは、非常に有効な決議が出されて、それを基に各国の政府が深刻に受け止めてくれ、予算措置など次のステップに出てくれたというものです。例えば、シベリアの北の方は北極海ですが、我々の分野からすると、こうした所に観測所が必要なわけです。何力国が共同で観測所を作り、人工衛星を使ってそのデータをリアルタイムで世界中に送れるようなシステムを作りたいと、世界中の人が考えているのですが、候補地はロシア領ですから、肝心のロシアでその交渉が必要なわけです。そういう時に、研究者がイニシアチブをとってロシア国と交渉したいという決議に導くことがあります。そういう交渉が全部終わった時が、組織側として、「今回は成功した」と感じる一瞬なわけです。

次に、開催地にとって良い会議とは何かと聞きますと、多くの人とその地に来て、たくさんお金を使ってくれて経済効果が大きかった場合は、当然その会議は良い会議になると思います。また、市民との交流も案外軽視できないものです。以前、非常に小さい会議ですが、25 人くらいのオーロラと磁気嵐に関する国際会議を北海道で、阿寒国立公園の隣にある陸別町というところで開催したことがあります。1994 年のことです。この町は「日本一番寒いところ」と誇っている街で、1989 年オーロラのカラー写真が地元の天文グループによって撮影され、それ以来「オーロラの街」と宣言しています。そこに行った時には、町民の方々も歓迎してくれまして、会議が夕方終わると、夜ずっと付き合ってくれたわけです。突然、人口 3 千 5 百人の町に外国人が駅前あたりを 25 人うろうろしたので、それは大変です。だからこそ、町民との密接な交流ができたのだと思います。これを機会に、その後もこの小さな町で、国内・国際会議が 3 件も開かれています。今年の 9 月には、環境庁主催の全国大会が高円宮様をお迎えしてその町で開催されています。また、開催地にとっては、参加者がその街を再度訪問したい、友達を連れてきたい、家族を連れてきたい、といった印象を持ってくれれば、その会議は非常に成功したと言えるでしょう。

最後に、参加者にとっての良い会議とはいったい何でしょうか。さきほど申し上げたかと思いますが、参加者というのは実に勝手なもので、いくら会議で良い議論ができて、良い決議文が出て、会期中天気が悪くて自分のホテルから会場への移動に苦労したとか、毎朝ずぶ濡れになったとなると、会議全体に良い印象を持ってくれない場合があります。この「失敗」は、天気が不安定な時期を選んだ組織側の責任であると、その人は怒るのでしょうけれども、とにかく参加者というのは勝手な集団で、いろいろな考えをもった人がおりますので、そうした意味でも 100 点満点をとれた会議は今まであり得ないのです。しかし、なるべく多くの参加者が満足するような会議を目指したいものだと思っています。「雨が降ったら…」とか、交通の便とかに万全の措置を準備しておくことです。

組織委員長になるまで

ここまで話してきました、さて、一体私は何者なのだと思っている人もおられるのではないかと思います。私は 1 研究者です。普通の研究者が国際会議の組織委員長になるまでには、どのような過程を経るのかということは、おそらく PCO の方にとって非常に興味のあることだと思いますので、そのことを少しお話ししたいと思います。つまり PCO は、どのような研究者に国際会議誘致のアプローチすればいいのかのヒントになるかも知れないからです。

国際会議に携わるに至った私自身の経験をもとにお話しますと、これまで、役職で言いますと、組織委員長とか、プログラム委員長という仕事に何度か携わってきました。この 2 つというのは非常に重要な役で、エネルギーと時間のいる仕事です。これまで、いろいろなサイズの会議を経験してきましたが、私も突然これらの役を経験したわけではありません。一番最初は、たしか 1982 年でしたが、その頃私はアメリカに住んでおり、小さな国際ワークショップを開催しました。参加者は 20 人ぐらいでしたが、翌々年には 150 人ぐらいの国際会議を NASA で組織しました。それから、初めに紹介がありましたように、IUGG のような、5 千人、6 千人規模の会議招致に参加しました。参加者数で言ういろいろな規模の会議に組織委員長あるいはプログラム委員長として参加したわけです。数 100 人規模の国際会議の組織委員長、もしくはプログラム委員長を 10 回ほど務めました。国際会議の組織委員長またはプログラム委員長という大役より少し、あるいはかなり、楽なものに、プログラム委員あるいは組織委員という役もあります。

国際会議には、まず 1 参加者として参加するというパターンが大方の場合です。まず、研究者の卵として、早い人ですと、大学院生の時から参加し始めます。ですから、例えば PCO が、国際会議を誘致するために大学の先生にコンタクトをする場合、いつもいつも単に 1 参加者として参加している人にコンタクトをしても、その人に国際会議を誘致してもらうことは不可能です。国際学会の役員をしている人は、最近では、ほとんど毎日のように E メールで意見交換をしています。学会の役員や役員は 10 人ぐらいですが、これらの人たちの間では、近い将来に会議開催の順番が日本に回ってくるといった情報があります。また、ヨーロッパで何年も続いたので、今度は日本やアジアで開催したい、といった情報が E メールで飛交っています。そうしたいいわゆるキーパーソンにコンタクトすることが必要でしょう。

私は、1 年間に 5 つ程の国際会議に出席するようにしておりますが、来年は出席する会議数が非常に多くなっています。ちょっと紹介しますと、フロリダで 3 月に開催される会議は、組織委員なので絶対に出なくてはなりません。それから、NASA で 3 月にひとつあります。その後 4 月にコロラドのボールダーという街で宇宙天気関係のワークショップがあります。5 月には、サンクトペテルスブルグとワシントン DC。6 月にはギリシャのクレタ島で会議があります。クレタ島での会議は NATO の主催で、200 人ぐらいの規模です。その会議は、世界中から将来有望な学生を 100 人ほど集め、夏の学校のような形式で 2 週間開催します。そしてその会議から、教科書を出版するという、ちょっと変わった国際会議

です。次のコスパ（COSPAR）という会議は、2年ごとに開催されている宇宙科学の会議で、去年7月名古屋で行い、私はプログラム委員長を務めました。2年後、つまり来年、ワルシャワで行われます。9-10月は台湾と札幌。札幌では、S-RAMP（太陽地球間現象）会議です。そして最後は12月にサンフランシスコで行われる会議です。これはアメリカ国内の学会で、毎年サンフランシスコで開催されているものです。

おそらく本日ここに参加されている方は、次の例は非常に勉強になるかと思しますので、ちょっと脱線します。何故かと言いますと、アメリカの国内の単なる1学会でしかないのに、8千人もの参加を見込んでいるからです。札幌で行うことが決定しているIUGGは、国際学会ですが6千人くらいの規模です。毎年同じテーマの同じシンポジウムがずっと続く国内の1学会に、どうして8千人もの参加者が集まるのかと考えると、分析が少々難しいところです。アメリカの1国内学会が何十年も同じサンフランシスコで会議を続けていて、かつ国際学会以上に人が集まるというのは、サンフランシスコに秘密があると思います。サンフランシスコという街が非常に魅力的な街であり、また8千人を悠々とこなせるだけの大きな会議場が2つあること。ホテルがどれだけキャパシティーがあるのか詳細は分かりませんが、サンフランシスコの持つ秘密だと思います。

国際会議の目的

国際会議の目的といえば、私たちの研究者の中では当たり前の話ですが、一言で学問の探究、真理の探究ということになるのではないのでしょうか。学問や真理には、本来国境がないわけですし、特に私たちが研究している地球または宇宙を相手にしている学問に国境がある方がおかしいわけです。ですから、そうした研究をテーマにしている人達が、1年に1回、2年に1回と、1ヶ所に集まって議論するということが、テレビ会議では全く達することが出来ないことがあるわけです。旅費がもったいないし、旅をする時間もない。このコンピューター通信が発達した世の中なのだから、国際会議など必要ではないという人がいるかもしれません。テレビ会議というのは、講義とか数何十人規模の会議には適していると思いますが、5千人が各分科会に分かれて議論を戦わせる場合には、テレビ会議やEメールでは果たせない点が沢山あります。研究発表の最終の形は、やはり論文出版であり、論文が歴史に残っていくことが最終的な結果となりますが、国際会議というのはその何ステップか前の段階に当たります。自分が何か発見したと思っても、100%確かではない場合、自分と同じ世界にいる同業者、あるいは競争相手と会って、目の前で議論を戦わせる、それが我々の分野では国際会議となります。ですから、論文があくまでも最終報告ですが、国際会議はそのステップになると考えています。

国際会議招致までのプロセス

次に、第何十何回というような大きな国際会議を日本に招致する場合に、いかなるプロセスを経るかというお話をしたいと思います。これはまさしく今回のIUGG招致成功を例

にとってお話ししたいと思います。

先程申し上げましたが、この会議は大変歴史のある国際学会であります、今まで一度もアジアで開催されたことがありません。1919年に9ヶ国が集まって発足しました。丁度、第1次大戦の終わった年に旗揚げしたことになり、ということはそれより数年間の大戦時に9ヶ国の研究者が集まって設立の議論をしていたという大変な学術団体なわけです。オリンピックのように、4年に一回集まっています。最初の9ヶ国に、日本も堂々と入っております。ところが、9つのうちの8つの国では、もう既に20年も前までにIUGG総会が開催されているわけです。そのため、どうして日本でもっともっと前に開催していないのかと、我々もずっと不思議に思っていました。次は、日本で開催されるであろう、あるいはしなければならないというのは誰が見ても明らかで、何年も前から、皆真剣に考え出していたわけです。

最初は有志の集まりだったのですが、日本学術会議の中の研究連絡委員会、この分野の学会から委員を1-2人ずつ出してもらって全体で30人が、日本招致のことを真剣に取り組み出したわけです。中には、「こりゃ大変だ」と後込みする人も出ましたが、そういう人は組織委員にならず1参加者になればいいわけです。このメンバーは、学術会議で準備委員会を重ね、議論を続けました。その際、日本で開催するならばどこが良いかを決めなければなりません。開催都市の決定条件はどのようなものがあるのだろうかといいますが、それは一言でリストアップすることは非常にむずかしいことです。いろいろな要素が絡み合ってくるからです。国際会議には、それぞれの目的があり、サイズも異なります。IUGGの例が全てに当てはまるということはありませんが、なるべくどの会議にも共通する点を選んでお話ししたいと思います。

会議の特殊性からの要件というものがあります。次に開催都市への注文があります。政治的な条件も加味する必要がありますが、これは少しレベルの違う話でしょう。その他、たとえば「しばらくヨーロッパでの開催が続いたので、次はどこか違う地域に行こう」といった地理的要素もあります。

まず、IUGGを例にとり最初の条件である、会議の目的や大きさから課せられる条件を考えてみます。このIUGG会議はGeneral Assembly(総会)といって規模が大きく、ここ20年間の記録を見てみますと、最低でも参加者が4千人集まっています。日本で開催する場合には、参加者がもっと多くなるだろうとふんでいます。日本という国は、地球科学、宇宙科学の分野の研究者が非常に多いわけです。ちなみに今年の夏バーミンガムで行われたIUGG総会への、日本からの出席者は約500人でした。全体で5千人くらいの会議だったと思いますが、アメリカがだんとつで1位、その次が地元開催国イギリス、そしてその次が日本という順になっています。日本は地震国、火山国、台風の国であり、そうした予測・実際の面からも、地球をよりよく知りたいという願望があるのは当たり前のことです。また、地球規模あるいは宇宙規模の学問といえば、やはり研究資金が要るので、お金のあがる国でこうした学問がどんどん進んでいるのは仕方がないことでしょう。

次に会議からの条件には、財政面の健全さも挙げられます。収入源として、参加者が払う登録料の他に、寄附金のことにも考慮にいれなければなりません。それから、補助金がい

から集まりそうかということも大事です。また当然、参加者数と収容能力が条件となります。6千人がその都市に2週間滞在するとなると、当然、開催できる街は限られてきます。例えば、以前、箱根のホテルに200人が集って国際会議をしたことがありますが、そうした場合とIUGGのような6千人規模の会議は全く違うわけです。準備委員会では、手分けをして全国の候補都市のリストアップを始めました。初めは20市程度からスタートしたのですが、条件を綿密に検討して議論を進めた結果、最終的には、京都と札幌が残りました。諸条件のひとつひとつに、点数を付けていきました。このプロセスに大体1年くらいかかりました。

このような、いわゆる普通の学会というのは、研究者なら誰もが応募をして、論文発表（講演）を申し込むことが出来ます。その代わり、ひとつの講演に与えられる時間というのは、多くても15分です。短い場合、7分というのがありました。6分間 presentation を行ない、質問を一つくらい受けてそれで7分になります。そしてまた次の人が同じこと、7分を繰り返します。そうしたことを朝から晩までやるわけです。うす暗い部屋で、聞く方も大変ですし、一体それで発表の内容が聴衆に十分に分かってもらえるのかということも問題です。単に、誰がどういうことを研究しているのかということや次から次へとデモンストレーションするのでしたら良いのですが、非常に大きな学会で1人が10分間喋るといふのでは、密接な議論が出来ないということの意味します。こうした難点を克服するため、議論主体の会議という形態もどんどん取り入れられています。議論主体の国際学会というのは、最近どんどん多くなってきています。たとえば、来週大洗で行われる宇宙天気に関する国際会議はまさしく議論主体です。ワークショップといった方がぴったりかも知れません。というのは1講演に与えられる時間は30分であり、その30分間に、誰がどの段階で厳しい質問をしても良いことになっているからです。議論が白熱した場合、30分で終わらないこともあるので、予備として夜まで時間をずっと確保してあります。

それから、スクール形式の国際会議というものもあります。先程話しました来年ギリシャのクレタ島での会議はこの形式です。島ですと「逃げる」ところがないということと、会期が2週間となりますとエキスカージョンもゆっくり取り入れることができるという意味で、isolated な場所、たとえば島での開催が多いようです。世界中から学生を集めて講師が講義をするわけですが、なぜ東京やニューヨーク、またはサンフランシスコなどの大都市で実施しないのかといえ、そうした都市では、忙しい講師の先生は自分の講演後どこかへ行ってしまうからです。インターネットやファックスに追い回されないで、仕方がないからと言いますと妙ですが、2週間学生と一緒にあって議論に応じるわけです。そうしますと、学生にとっても、講師から研究の中味以外の裏話も聞けたりして非常に良いですし、招かれた先生方にとっても、自分が講義したことに対して、滞在先でどんどん原稿が書けるわけです。今回の主催団体であるNATOは、そこで集めた論文をまとめて、なるべく早く教科書として出版しようという企みをもっています。以上大きく分けると、会議の性格から課せられる要件、主催者側からの条件、開催都市への条件の3つがあると言えます。

ここで特に強調したいのは、研究者というのは矛盾したことを要求するということです。一般に国際会議へは、交通、特に国際線の便の良い所が好まれますが、逆に交通が不便な

ところを好む研究者もいます。私自身を含め、「ロンドンのヒースロー空港に着いてすぐそこに会場がありますから便利です」と言われるよりも、ロンドンから列車に乗って何時間か行ったところに行く方を好む研究者もこの頃多いのです。また、開催都市へ期待することも研究者によって異なるので要注意です。ですから、札幌に IUGG を招致する際も、外国人何人かに調査をしました。京都は、何回も行ったのでもう結構です、という人もいるわけです。但し、一度も日本へ来たことの無い人は、やはり京都へ行きたいということになります。このように、研究者集団は全体として矛盾したことを要求するので、その意味で 100 点の会議はあり得ないわけです。つまり、点数をつける側で矛盾しているというわけです。

それから、快適さの問題ですが、温度、湿度、空気、これはきれいなほうが良いですね。札幌と京都の争点になったのは、気候の差という点が当然あります。IUGG 総会は慣例として夏に行われることになっていますから、夏の京都と夏の札幌、どちらがいかということになります。この点では、明らかに札幌の nice and cool さが勝つわけです。しかし、日本の文化 / 歴史の代表としては、京都にかないません。

また強調したいことは、参加者が泊まるホテルと会議の会場が歩いていける距離内であることが、非常に望ましいことです。土地確保の関係で地方都市の中には、コンベンションセンターを中央駅から車で 1 時間も離れたところに建てざるを得ない場合がありますが、そのような場合には、是非ホテルを会議会場から歩いて行ける範囲内に作ってほしいと思います。地下鉄で簡単に行けるのではないと言われるかも知りませんが、初めて来た外国の街で、バスとか地下鉄に乗るとなると、切符の買い方も分からない人にとっては不安になります。自分が外国に初めて行ったときのことを思い出して、親切さも大切な心使いでしょう。例えば、今度ワルシャワで行われる会議で、ホテルと会場を電車で 30 分も移動しなければならないと知ったら、そういう会議へ行くのはやめておこうということにもなりかねません。その意味で、会議の会場が宿泊するホテルの中にある場合などは、非常に歓迎されます。

次に、都市を決める時に、外国人の持つ日本のイメージに直結したような街というのは喜ばれます。要するに、その国の歴史とか文化を代表している町というと、日本の場合京都とか奈良になるわけです。また、街の直感的なイメージというのも案外大事な要素です。緑が多いとか、空気の爽やかさ、街の中心に大きな公園があるということで、札幌のイメージが良いわけです。以上述べたすべての条件を全部プラスにして、100 点満点になるということは絶対にありません。街のイメージにグッと惚れ込む研究者あるいは学会もあれば、それより実際の面を扱う人もいるからです。こうしたいろいろ点を踏まえ、京都と札幌の 2 都市について検討した結果、最終的に札幌になったわけです。

ところが、準備委員会で札幌に決定したからといって、札幌に決まったわけではありません。もし IUGG 総会の日本招致が決定した場合には、札幌にしましょうというだけで、最終的な決定ではないわけです。集まった準備委員 30 人の中で、札幌に招致しようと決めただけなのです。そして、今年の夏バーミンガムで行われた IUGG 評議会で、今度は対国の議論 / 評決があるわけです。IUGG の評議会で、どの加盟国も 1 票の投票権を持って

ます。IUGG 総会が今まで1度もアジアで開かれていないということで、理事会の方で、最終候補を日本とインドに絞っていました。そして、インドと日本となった時に、今度はそこに政治的条件が入ってきたわけです。日本が何かにつけて便利だと言えば言う程、インドでの開催は発展途上国を助け、その国の学問レベルを上げるために必要だという議論が、投票の直前になって出てきました。結局、投票の結果は24対14で、日本が勝ちましたが、あの評議会の投票結果を待つ間の張り詰めた雰囲気は、思い出したくもないいやなものでした。

会場へのリクエスト

我々主催をする側として、開催地、会場または宿泊ホテルへの要望事項が沢山あります。簡単に申し上げますと、会場には、いろいろなサイズの会議室が並んでいることが好まれます。大規模な General Assembly であればあるほど、参加者も体力的に疲れます。10分程度の講演を朝から晩まで暗い会議室で聞いていると、時々外に出たくなるわけです。外といっても建物の完全な外へではなくて、ロビーへということですが。時には、ロビーが会議室の中よりも込み合っていて、盛んな議論がそこで続いていることもあるぐらいです。ですから、会議室のすぐ外のロビーにできるだけ広いスペースが欲しいという要望があります。もちろん、会議室内やポスター会場での備品についても、最新のハイテク機器を全部揃えて欲しいわけです。

それから宿泊ホテルについては、予約と予約の間に入る旅行社やエージェントがうまく機能しないことによって苦情が起こります。例えば、参加者が都合により、急に予定を変更したりキャンセルしたりする場合があります。そうした時に、EメールやFAXで、エージェントやホテルがきちんと対応し、確認の返事をくれるというシステムが要求されます。そういうことがしっかり迅速にできるかどうかによって、その街に会議をもっていくかいかないかが決定されることもあります。

学術的な会議が成功したということは、学問的成果、つまりその会議からハイレベルの教科書が出たり論文が出たりすることが最も大事です。その次は、おそらく、会議の運営がスムーズにいったかどうかです。参加者にトラブルがなく、思う存分楽しんでくれたかどうかです。例えば、招待講演者の飛行機が遅れたといった場合に、きちんと緊急への対応ができていくかということです。代わりの講演者を手配できたか、変更のアナウンスが全員にいきわたったかが問われます。去年名古屋で開催したコスパー会議という1700人規模の会議では、100件くらいになんらかの形で変更がありました。それも当日、あるいは前日になってからの変更です。1700人もいますと、毎日掲示板のところへ行って変更アナウンスを克明に全部、自分のプログラムブックに写しとるという人はまずいません。そうすると、名古屋の場合には会議室が20以上ありましたが、できるだけ迅速な方法で知らせる、毎朝各部屋のドアに変更プログラムを掲示するという体制をとりました。そのためにプログラム委員長の部屋のコンピューターには、いつも最新アップデート情報が入っているようにしました。

途上国あるいは学生への財政的援助も大事な要素です。当然、より多くの旅費や滞在費を出してあげれば、それだけ喜ばれますし、参加者数も多くなり、成功したということになります。それから備品ですが、案外これは全国のあらゆる会場に備わっているわけではないですね。例えばビデオ一つにしてもいろいろなモードがあり、すぐに対応できなければいけません。また、あり得るのは、レディースプログラムという言葉が、まだ国際会議で使われているところがあるようですが、これは一種の差別用語です。ファミリープログラムとか、何かいい言葉を考えなくてはなりませんね。それから、お国柄を反映して、会場のアルバイト係がなかなか現われないことは不評の一因になります。電気係とか、スライド係とかが時間になっても来ないのです。逆に日本の場合、学生のアルバイトが多すぎて渋い顔をされることがあります。参加者 50 人に対しアルバイトが 1 部屋に 5 人もいて、質問が出た時にマイクを持って走るのですが、実際問題として 50 人くらいですとマイクは足りないのです。日本は金があるから、ああいうところに金を払うのだとか、我々の貴重な登録料をあんなところに使っているのか、といった不評の手紙が実際に会議終了後に委員会にきたことがあります。

最後に、これはどうしようもない話ですが、日本の物価高の話をしましょう。例えば、アメリカでメロンを買うと 1 個 100 円くらいなのに、日本ではなんで 5 千円もするのか、と組織委員会の責任でもないことでクレームが来たりします。100 円、200 円くらいかなあと思って 1 個買ったら、5 千円も取られ、これはバーでお金を騙し取られたのと同じだといった手紙が来たりします。これにまじめに対処するには、最初に、サーキュラーで日本で非常に高いものは次のものであると書く必要があります。例えば私は半分冗談で、つまり半分本気で、メロンはお見舞い用に使うもので日本でメロンを食べてはいけないといったことを E メールで世界中にまわしたことがありました。ついでに食べ物の恨みの話をしますと、非常に大きい会議のパーティーですと、参加者数の予想が狂うことがよくあって、食べ物が足りないとか、お皿を持って長い行列をつくっても、卵焼き一個にしかありつけなかった、なんでこれに 5 千円も払わなくてはいけないのか、といった苦情もたくさん耳にします。

これからの国際会議

そろそろ時間ですので、こうした実際的な話はこれでやめておきますが、最後に二つ言っておきたいことがあります。それは、これだけの数の国際会議が日本で行われるようになり、組織委員長とかプログラム委員長として参加する日本人も多くなってきました。面白いのは、私自身は日本人なのですが、最初にご説明しましたように、今まで国際会議の半分は外国で組織しています。日本人が外国で国際会議を行うことは、全然おかしいことではありません。これからは、国際会議というものが、21 世紀にかけてさらに変化していく段階であり、大袈裟な言い方ですが、逆にこうした変化を知らなければ、世界の常識に遅れてしまうことになります。

その一つは LOC、ローカル組織委員会といって、国際会議のお世話をする運営委員会、

例えば、日本で開催される場合、日本にできる委員会のことですが、この役割がどんどん変わってきているということです。例えば、IUGG の場合、最終的に日本に招致する際に、京都と札幌が候補に残ったお話をしましたが、その際、京都では今まで何回も大きな国際会議が開かれており、会議慣れした人材も揃っている、地球・宇宙に関する研究者が何十人も京都大学におりそうした研究者が皆でまとめて委員会を作るのだから安心して下さいという、京都招致賛成の意見が出たことがあります。しかし、私は、自分の経験を通し、この理由付けに反対しました。そこで二つの例をご紹介します。ご説明したいと思います。JPL, ジェット推進研究所という NASA が有する非常に大きな研究所がカリフォルニアにあります。その研究所で国際会議をしたことがあります。その時は私ともう一人、アメリカ人が組織委員長であり、主催団体は、先程言いました米国地球物理学連合で、そのいるプロ級の人がすべてをやってくれました。ですから、組織委員長は、開会で挨拶、パーティーでちょっと冗談のスピーチをただけでした。もちろん、準備の段階で開催した数回の委員会で進行役はしましたが、会期中は、私も 1 参加者として、論文を発表して議論をするだけなので、非常に楽なわけです。つまり、日本に組織委員長がいて、NASA で国際会議が行われるといった時代がもう 10 年も前からきているというわけです。日本に国際会議を招致する場合、この街にはこういう研究者がいるから有利ですというのは 21 世紀になるとますます時代遅れになります。もう一つの例は、去年、名古屋で行われましたコスパーという宇宙関係の国際会議です。その時には、LOC 委員長ではなく、プログラム委員長をしましたが、これは私が名古屋大学にいるから、名古屋で行う国際会議のプログラム委員長になったわけではないのです。例えば、前々回のハンブルグ総会で行われた時には、プログラム委員長はイギリス人でした。それから、昨年その大会は名古屋国際会議場で行われましたが、LOC 委員長を含めたほとんどは東京方面の人たちでした。この二つの例から申しまして、これからの 21 世紀は、会議開催地に研究者がいなくてはならないという原則は全くありません。極端な話ゼロでも構わないのです。

開催地に全くその分野の研究者がいなくても国際会議ができる時代になったということです。先程の名古屋のコスパーのプログラム委員長をやった時には、開催の数か月前になったとき、毎日約 200 もの E メールが届きました。名古屋のコスパーでは、合計で約 50 のシンポジウムが 1 週間に行われました。また投稿論文が 2,700 もあり、これを全てプログラム委員長が担当するのは大変なので、当然セクレタリーが付きましたが、そのセクレタリーの 1 人はパリ、もう 1 人はドイツのマックスプランク研究所におりました。つまり、今は日本にいる私の秘書がドイツとパリにいる時代なのです。ですから、NASA で開催した JPL の会議や名古屋のコスパーの例のように、日本にいながらアメリカで国際会議ができ、東京にいながら名古屋でも九州でも国際会議ができる時代になっているのです。これはコンピューターや Eメールの発達によるもので、それを知らないと世界に遅れていくのではないかと思うのです。

国際会議のプロを育てよう

我々大学教授には研究と教育という本業があります。4年間この重大な用務を止めて、国際会議の準備にかかりきりになることはできないわけです。ここで申し上げたいことは、日本は、会議のプロフェッショナルな人材を養成するという点で遅れていると思うのです。なぜ、日本にいながらアメリカの国際会議の組織委員長になれたかと言いますと、アメリカでは、一つの学会に数人、大学にはコンベンション部というように、会議の受入のプロフェッショナルな人材がいるからです。会議屋さんです（総会屋ではありません）。米国地球物理連合という学会からは、「国際会議をどんどんやって下さい」という広告がときどきまわっています。そのキャッチフレーズに、“You Please Do Science. We Do Management.”と書かれています。つまり、「先生方は、どうぞ黙ってお仕事をして下さい。私達が会議のマネジメントを全部します。」ということです。アメリカにはそうした、誇りを持ち、またコンベンションへの総合能力を持っているプロフェッショナルな人材がいるわけです。先程の JPL で行いました国際会議では、初めに提出する提案書や寄付金集め等、全てそのプロフェッショナルなセクションあるいは担当者がやってくれました。私は書類にサインをすれば良いだけなのです。例えば、NASA とか National Science Foundation といった重要な機関に、その担当者が手紙を書いたりもしました。国際会議プロを日本で言えば、単に英語ができるといった程度ではなく、まさしく本当のプロです。また一つの学会に2年あるいは、4年間付き合ってくれて、その専門分野の用語まで叩き込むような人も増えています。

次にどのような研究者が国際会議を招致しそうかという話をしましょう。研究者は早ければ大学院の頃からどんどん学会で発表し出します。その中の何人かは、将来国際会議を組織する側になるわけです。国際会議のプロフェッショナルは国際会議を組織しそうな人をリストアップしておき、コンスタントにコンタクトをして日本誘致に導くということが大切でしょう。こうしたことは、アメリカでは10年も前から行われています。ですから私たち自らが国際会議をやりたいと言い出す前に、こうした会議のプロフェッショナルの方で「調べ」が進んでいるという感じです。こうした組織委員長ハンテングは、これから日本でもどんどん進むと思います。5年程前に日本でも COE（センターオブエクセレンス）という研究システムができました。学問あるいは研究において、今までどっちかといえば、日本は平等主義でしたが、国際的にトップクラスの優れた研究所、グループを文部省や科学技術庁が COE に指定するというものです。我々の太陽地球環境研究所も指定されております。COE に指定された研究所は、日本だけではなく、その分野で世界のセンターということになります。指定されるにはいくつかの条件があります。また指定された研究所等の一覧表というものもあります。世界のセンターなのですから、そうしたところに出向いてコンタクトをすれば、国際会議を招致する可能性が常にあるわけです。

会議のプロフェッショナルは、すでに開催が決まった会議をあとで手伝うだけではなくて、提案書の段階からリードし、組織委員長はただ会場に来て挨拶をしてくれれば良いという程度までプロフェッショナルになって欲しいと思います。世界ではこのようなプロフ

ェッション化がどんどん進んでいますが、日本でもこれからこうした時代になると思います。

それから、会議招致に関し、日本国内でも、都市間の競争が激化しています。立派な会議場が全国にどんどん出来ています。また、アジアでも国際会議の誘致競争が非常に熾烈になっています。我々の学会でも、香港やシンガポールで国際会議に参加したことが何度もありますが、それぞれ、魅力的な案を作って招致をしているわけです。

結論として、一つにはLOCの役割がだんだん変化しているということ、それから、本当に先を見越したプロフェッショナルな人材を養成して、我々を楽にしてくださいということです。研究者を楽にすること、つまり国際会議の招致がビジネスになる、つまりお金になる、時代がそこまできているということを申し上げて、本稿を終わりにしたいと思います。